国際交流基金助成事業報告書

薬学部 薬学科 6 年次生　T. O

1. はじめに

私はこの度、大阪医科薬科大学国際交流基金の助成を受けて、2024 年 9 月 15～18 日にカナダ・バンフで開催された International Association of Therapeutic Drug Monitoring and Clinical Toxicology 2024 (IATDMCT2024)に参加し、自身の研究成果の発表を行ったので、ここに報告する。

バンフの風景

2. 国際 TDM 学会について

国際治療薬モニタリングおよび臨床毒物学協会（IATDMCT）は、治療薬のモニタリングや臨床毒物学に関する国際的な専門家の組織である。この協会は、医薬品の効果と安全性を最大限に引き出すために、科学的知見をもとにしたモニタリング技術の発展を推進している。主な目的としては、1. 研究と教育: 薬物療法のモニタリングや毒物学に関する研究の促進と教育プログラムの提供、2. 国際的なネットワークの構築: 専門家同士の交流を促進し、情報の共有を図る、3. ガイドラインの策定: 臨床現場での適切な薬物モニタリングや毒物管理のための指針の提供、などを行っている。活動内容としては、1. 学術大会: 定期的に国際会議を開催し、最新の研究成果を発表、2. 出版物: 学術雑誌やガイドラインを発行し、専門的な知見を広める、3. ワークショップやトレーニング: 実践的なスキルを身につけるための教育機会の提供、などを行っている。IATDMCT は、医師、薬剤師、研究者、臨床検査技師など、さまざまな専門職のメンバーで構成されており、国際的な視点での治療薬モニタリングの発展に寄与している。

3. IATDMCT2024 の様子

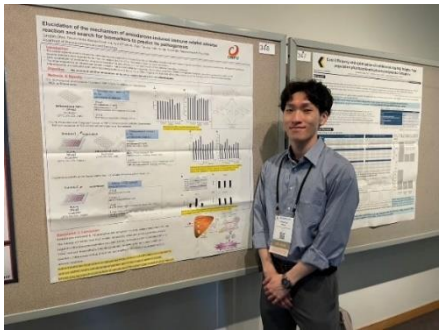
Banff Centre for Arts and Creativity で学会が開催された。ポスター発表、口頭発表、シンポジウム、プレナリーレクチャー、ワークショップなどが行われていた。カナダ

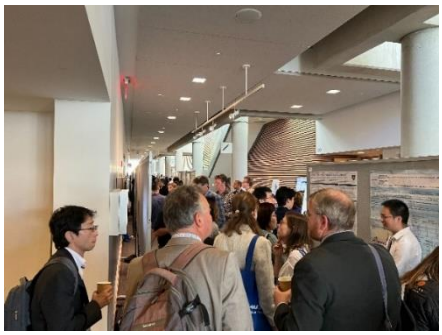
での開催ということもあり、欧米からの参加者が多く見られたが、アジアやアフリカなどからの参加者も多く見られた。各セッションに参加させていただいたが、どの内容についても興味深いものが多く活発に意見交換が行われていた。

口頭発表の様子

ポスターセッションは指定された時間に発表者がポスターの前に立って質疑応答を行うフリーディスカッション形式であった。またセッション中は参加者に軽食や飲み物が提供され、気楽な雰囲気でのディスカッションが展開されていた。

私は 17 日に「Elucidation of the mechanism of amiodarone-induced immune related adverse reaction and search for biomarkers to predict its pathogenesis」という演題でポスター発表・ディスカッションを行った。自身のポスターの設置場所があまり人通りが多い場所ではなく、開始 5 分ではなかなか立ち止まってくれる方がいなかった。できるだけの方に今回の発表内容を知ってほしく、英語で質疑応答を行ってみたいと渇望していたため、このままでは学会に参加させていただいた意味を失ってしまうと不安に感じた。そこで私は「人を呼び込む」ことを行った。自分のポスターは興味深いものを扱っているという旨を伝え、様々な人に自身のポスターを見に来ないかと会場を走り回った。そしてついに、私の発表内容にいくつかの質問や意見を頂くことができた。しかし、上手く英語が聞き取れず質問頂いた内容を何度か聞き直すことがあったり、それに対する回答をスムーズに伝えられないことがあったりと、反省点は山積みであった。十分ではなかったが何とか伝えたい内容は伝えられたと少しの達成感は感じた。また、他の発表者に対しても英語で質問することは少しのためらいはあったが、自分なりに何度か質問を行った。自分にとってとても有意義で意味のある時間だと感じた。





ポスター発表での様子

4. バンフについて

バンフは、カナダのアルバータ州に属している町である。バンフ国立公園内に存在しており、カナディアン・ロッキー山脈観光の中心地である。夏季の登山、冬季のスキーなどで賑わうリゾート地であり、温泉保養地としても人気が高い。比較的涼しく乾燥した気候で過ごしやすい環境であった。ダウンタウンでは常に背景に山脈がうつっていたので、どこを切り取っても絵になるような街並みだった。

左：バンフでのオーロラの景色　右：バンフのダウンタウンの様子

5. 終わりに

今回の国際交流事業は、私にとって初めての学会参加であった。発表だけでなく街での買い物や挨拶でさえも、英語で自分の意思を伝えることの難しさを痛感した。しかし、この経験がきっかけで、研究の世界で生きていくためには英語は不可欠であることを再確認し、自身の英語技能をより高めたいと考えることができた。もし今後、再び国際学会で発表する機会があれば、より良い発表・ディスカッションができるように、日頃より英会話能力の向上に努めたい。

最後に、今回の国際交流事業を助成下さった大阪医科薬科大学国際交流基金に厚く御礼申し上げます。また、その他様々な面でサポート頂いた方々に深く感謝致します。